

夏空の雛形だらう向日葵の間を歩き来して染まる蜜
蜂 佐佐木頼綱

分子・原子といった極小単位の構造と宇宙の大きな構造とがどうやら対応しているらしい、という話を高校生時代に聞いたような気がする。この一首を読んで、そんな話を思い出した。向日葵の引力圏を飛ぶ蜜蜂は宇宙の運行と対応してらしい。

四百年経て故郷ふるさとに戻されて展示されおりウイリアムの遺書 森祐希子

「ウイリアムの遺書」という音のひびきが楽しい一首。この「ウイリアム」はウイリアム・シェイクスピア。この作者の今月の五首は、「国立公文書館」にふだん保管されているシェイクスピアの受洗記録・結婚許可書・遺言状・埋葬許可証などが、故郷のストラトフォード（だろう）で公開展示されたのをじっさいに見に行った折の作らしい。研究者ならでは専門的なディテイルがうたわれている注目作。

シェイクスピアは自分の遺産のうち、ジュディスへ渡る分がクワイニーの不実な行為にさらされることのないよう遺言書を修正したということである。

わたくしは働く女カツサンドを頬張り朝の馬車道をゆく 原尚美

「馬車道」は、関東の者にはなじみの地名だが、関東以外の読者は知らない人も多いだろう。横浜市の地名である。一首、ストレートな表現が魅力的で「馬車道」が

短歌の現在

No.428 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

「働く女」と直接にひびきあつて、ユーモラスな空気を
もたらしている。

いるか肉、甘き赤飯。孟蘭盆の父祖の郷里を味はふ
夕 佐藤博之

孟蘭盆会では甘く味付けした赤飯（かなり珍しい）と
イルカの肉を食べるといふ。どこだろう。一連を読むと
飛行機でたずねた北のどこかららしい（ネットで見ると岩
手県か）。珍しい食物で味わう父祖の地の歴史と空気が。

野放図に蔓を伸ばした朝顔をもてあましてる生真面
目な朝 吉野美野里

ふだんは気にならないのだが、なぜか、朝顔の蔓の伸
びぐあい、なんとなく気になっている朝。ユーモラス
な結句が、野放図を心のどこかで支持している普段を反
照している。

切り株にあつ新しい芽の束が低く揺れおり海草のご
と 大谷ゆかり

巨木を伐り倒す歌は、新聞・雑誌等へ投稿されてくる
歌などで、よく見る。日本各地で、毎日のように大きな
木が伐られているのだろう。この作、「あつ新しい芽が
……」そして「芽の束」の表現的な新しさがポイント。
ただ「海草のごと」はいかが。

すべりひゆ暑さを知らず勢いですくすく育ち青々そ
よぐ 宮地瑛子

「すべりひゆ」は食べられるらしいが、まあ雑草であ
る。雑草をクローズアップして、良家のお坊ちゃんを表